

豊かに存在する水田の風景

昨年9月の放鳥から、コウノトリの野生復帰が実践段階に入った兵庫県北部の豊岡市では、人工飼育のケージの外に飛び立った5羽の活動が地域を賑わしている。大阪や島根へ突然数百キロの旅に出たり、巣を作った所が電柱で感電の恐れから撤去されてしまったり…。彼らの待望のヒナ誕生はまだだが（5月25日現在）、予想以上に野性を発揮して楽しませてくれる。

35年前、日本の野生コウノトリはここで姿を消した。最後までいたのだから彼らが生きられる条件がそろっている場所と思うが、絶滅の一因となった毒性の強い農薬はなくなったものの、随分住みづらくなっただ。

魚やカエルが豊富な広大なえさ場だった豊岡盆地の湿田は、土を高く盛った乾田に変わり、巣を作っていた里山は荒れてしまった。車が増えた道路での交通事故や電線への衝突事故も心配されている。すっかり様変わりした環境をコウノトリが住めるように変えていこうというわけだが、何しろ羽を広げれば2メートル。生態系の頂点に立つ大きな鳥ともう一度いっしょに暮らそうという世界でも例のない人間社会の実験が始まっているのだ。

成功のカギを握るのは農業である。現地では「コウノトリ育む農法」という稲作技術が確立され、今年は前年の倍の100ヘクタールで実施される。無農薬か減農薬で栽培し、できるだけ一年中水を張って大食漢の鳥のえさとなる水田生物を増やすというものだ。6月中旬に行ってきた中干しを約1か月遅らせる。これによりオタマジャクシの段階でひからびていたカエルやヤゴが生き延びられるようになった。また1.5メートルの落差のある田んぼと排水路の間に設けた勾配の小さな長い魚道をドジョウなどが遡上してくる。

生き物が豊かな環境で育ったお米は安全安心なブランド米として有利販売される。こうした仕組みを広げる原動力になっているのが、農家や普及センター、NPOなどが取り組むさまざまな新しい栽培や調査のデータだ。

コウノトリは稲を荒らす害鳥というイメージを持つ農家が少なくないが、4年前から豊岡に住み着いた野生コウノトリ「ハチゴロウ」の追跡調査で、被害がほとんどないことが明らかになった。また、無農薬栽培の方が農薬を減らし

た栽培よりも、天敵の存在が効いて害虫被害が少ないことも分かった。「何十年も虫を見れば農薬で殺してきたのを、自然の生態系にまかせてみようというのだから体験とデータが必要」と取り組む農家はいう。

コウノトリ育む農法の田んぼが生産するのはブランド米だけではない。生き物とともに田んぼが本来持つ情報や力を沸き出している。収穫量と生産性という価値に特化して、数十年間で田んぼの中のことに無知になった人間たちに、水田生物の頂点にいるコウノトリが教えてくれているのだ。人がこめた思いとともに豊かに存在する水田の風景は、そこで舞い、暮らすコウノトリによって新たな物語が日々生まれる舞台となっている。それは、すっかり価値が薄れてしまった日本の田んぼの日常とあまりにも異なる。

米の価格下落から多くの農家にとって田んぼはやっかいな負担だ。そうした持ち主の思いすら消えてしまった放棄田が急増しているが、その背後にある山の荒廃はより凄まじい。山と田んぼの「緑」は、多くの農村住民の目には「負」の存在、あるいは目に入ってこない無意味な存在なのかもしれない。「何もない所」と嘆く言葉を耳にするたびにそう思う。都会の子どもが学校教育などで田植えを体験する機会が増える一方、田植えを自分の子どもに手伝わせる農家は10軒に1軒もないだろう。田舎で育っても、地域の緑や川の記憶を持たずに高校生まで育ち、自分が暮らしてきた大半の風景が荒廃していることを知らないまま地域を出ていってしまう。「農の時代」を本当に迎えるためには、まずこうした状況を直視することが必要だ。

農村が抱える根本的な問題に気付くための手掛かりが、豊岡で今生まれている風景には詰まっていると思う。コウノトリという素材の凄さの一つは、そのスケールゆえ山から田んぼ、川、人の生活を含めた地域社会全体を変えることを迫ること。そして、地域の記憶につながる「種」であることだ。50代以上の人は子どものころ飛んでいたこの鳥を知っている。大きな意味をたずさえて空に蘇った。この鳥は、自然の中でまだ息づいていた昭和30年代の日本の農村文化の記憶を呼び覚ます種でもある。

（神戸新聞経済部記者（編集委員 食と農林水産のページ担当）

辻本一好・つじもとかずよし）